

昭和初期農村小学校における体験的郷土教育の展開

— 斎藤富の理論と宮城県中田尋常高等小学校の実践 —

Unfolding the Provincial Education Through Experience at an Elementary School in a Rural Community in the Early Days of Showa: Focusing on the Theory of Atsushi Saito and a Practice of Nakada Elementary School in Miyagi Prefecture

大友 晃

(宮城県立聴覚支援学校小牛田校)

問題の所在

昭和に入り農村の窮乏と疲弊が深刻さを増し、農村教育の再建のため、郷土教育が全国的に広がりを見せた。このような状況において、文部省も郷土教育に関心を示し始め、昭和5年度からの各師範学校に対する郷土研究施設費交付、同6年度の師範学校規定中改正と、郷土教育推進の方向性を明確にした。そのねらいは、愛郷心、愛国心の育成にあったが、そのことを契機とし、多様な実践が全国的に展開されることとなった⁽¹⁾。

これまで郷土教育に関する先行研究の多くが、体制側の教育政策とそれに対抗的な民間教育運動という構図でなされ、理論的指導者とそれに評価された師範附属小や都市部小学校が検討対象とされてきた。そのため、郷土教育は農村小学校において全国的展開を見せたにもかかわらず、その先行研究はほとんどなかった⁽²⁾。

東北地方の農村に位置する宮城県中田尋常高等小学校〔以下(中田小)〕でも、文部省や郷土教育連盟とは異質な、特有な実践が展開された。

昭和6年12月、東京帝大文学部教育学研究室は全国の郷土教育実践校443校に対して実態調査を行い、その結果、目的から見た郷土教育の実践を、以下のように分類した。①客観的郷土認識を目的とするもの、②郷土意識あるいは郷土愛の覚醒を目的とするもの、③児童の体験的世界の拡充を目的とするもの。そして当時の多くの農村小学校の実践が、疲弊した農村再建のために、農村現実の理解を目指し、①に該当するとしたのに対し、中田小の実践は、その多くが都市部小学校の実践である③に該当し、児童の生活環境に着目し生活体験の拡充を目指したと特色付けた⁽³⁾。また、小

原国芳は、生活中心の大正新教育の流れを継承し、郷土文化の体験を目的に、児童の生活姿態の分類と学習段階の設定、それに基づく郷土調査、郷土かるたや郷土すごろく等の、学習方法の工夫を図った実践とした⁽⁴⁾。さらに、最近の研究では、佐藤高樹氏は、中田小郷土教育の学習内容に着目し、各学年特設郷土科における教材配列の実際について詳細に検討している⁽⁵⁾。

これらの先行研究では、中田小郷土教育を、その学習方法に着目し、大正新教育の流れによる児童本位の学習方法を積極的に導入した実践として論じた。あるいは、郷土を対象とした学習内容の実際に着目し、論じた。しかし、当時同小では大正新教育の流れによる直観的な学習方法の工夫と児童の生活環境に密接な学習内容の選択と教材化の工夫を図り、それらを組み合わせ、郷土教育を推進した。それは、農村としての中田の地域性を反映した実践でもあった。

本論の主旨は、郷土に着目した学習内容の構築そして、それと密接な直観的な学習方法の実践の視点から、昭和初期中田小郷土教育の全体像を検討することにより、その独自性を明らかにすることである。検討視点は次の3点である。①昭和初期、中田小郷土教育推進の中核的存在であった当時の校長、斎藤富の郷土教育論、②中田小特設郷土科カリキュラムの特質と展開、③中田小郷土教育の独自性。検討の際、特設郷土科カリキュラムである『中田郷土科教材配当表』の完成が、昭和6年度であることから、昭和初期の概念をこまめでとし、論を進める。同小の実践を取り上げるのは、第一に、昭和初期、宮城県内で先駆的立場で郷土教育を推進し、その実践が注目されていたこ

と、第二に、系統的、継続的な実践がなされていたことである。

I. 昭和初期宮城県郷土教育の興隆と中田小

1. 昭和初期宮城県郷土教育の興隆

本県郷土教育興隆の要因として、当時の初等中等教育における画一的知的教科目を主内容とする教育への反省の他、大正末から昭和初期にかけた農村窮乏の現実が、郷土教育興隆への地盤を提供したことが指摘された⁽⁶⁾。

具体的な動向として、昭和5年2月9日、中田小を会場に本県初の試みとして、第一回郷土教育研究会〔県教育会後援〕が開催され、また、同年

7月13日、桃生郡北村小を会場に、第二回同研究会が開催された⁽⁷⁾。第一回目では実践報告が多かったのに対し、第二回目では郷土教育の認識や共通理解の深化を図る討議がなされる等、その充実ぶりが指摘された⁽⁸⁾。

郷土読本編纂も盛んになり、《表1》『宮城県内郷土読本出版状況』で分かるように、昭和7、8、9年度の出版数が顕著である。このことは、県内郷土教育の興隆が、文部省が昭和5年度から翌年にかけて実施した、各師範学校に対する郷土研究施設費交付、同6年度の師範学校規定中改正以降の郷土教育の興隆という、全国的な動向に沿ったものと言える。

2. 中田の風土と中田小郷土教育

中田小「施設改善意見書」〔大正6年〕では、当時の新教育思潮の影響下での、教職員の教育内容改善に向けた意気込みと、その先取的取組が指摘された⁽⁹⁾。また同校訓導星野達郎は、高学年用郷土読本「児童の郷土誌」〔大正14年〕で、当時の中田村の地域性を、仙台市を市場とする近郊農業により、他の農村に比較し経済的に恵まれ、住民の教育への関心が高いとした⁽¹⁰⁾。

仙台市近郊に位置し、経済面で比較的恵まれ、住民の教育への関心が高いという地域性、そして新教育の思潮を積極的に取り入れ、実践を図った先取の校風を背景に、同小では、他に先駆け郷土教育を推進することとなった。

同小郷土教育を大正末以降推進したのは、当時の校長石川謙吾である。彼は、児童の郷土意識の覚醒のため、昭和3年度以降、毎年、郷土偉人祭を開催し、祭日に郷土偉人に関する講話を試みる等郷土教育実践への機運を高めた⁽¹¹⁾。《表2》『中田小校内研究誌〔体験〕発行状況』を見ると郷土教育を主な内容とするものは、昭和3年度以降増加し、この頃から同小教員の郷土教育への関心や研究実践への意欲が高まったことが分かる。

石川校長の実践を踏まえ、前任校丸森尋常高等小学校〔以下（丸森小）〕での実践を拡充し、中田小郷土教育の理論的、実践的中核として尽力したのが、昭和5年度に着任した、校長斎藤富⁽¹²⁾であった。

《表1》宮城県内郷土読本出版状況

年 月	教科書名	著者・編者	発行
大15. 3	児童用郷土読本	鹿島台小學校	鹿島台小學校
昭3. 1	「文展」郷土号	名取郡中田 尋常高等小學校	中田尋常 高等小學校
3	北村郷土読本	桃生郡北村小學校 齋藤莊次郎	北村尋常 高等小學校
8	我が村誌	鹿島台村教育會	鹿島台小學校
4. 10	郷土文撰	中田村 農業補習學校	中田村 農業補習學校
7. 9	宮城県郷土誌	宮城県初等教育學會	學習社
11	多賀城郷土読本	多賀城村教育會	多賀城村教育會
12	藤尾村誌	伊具郡藤尾村尾山 尋常高等小學校村誌編纂部	尾山尋常 高等小學校
12	補助教材宮城県誌	仙臺市五橋 高等小學校	仙臺市五橋 高等小學校
12	吉田郷土讀本	黒川郡吉田 尋常小學校	吉田尋常小學校
12	「郷土誌」大洋特 輯号	槻木尋常 高等小學校	槻木尋常 高等小學校
8. 5	仙臺市民讀本	仙臺市五橋 高等小學校	仙臺市五橋 高等小學校
7	仙臺郷土誌	仙臺市教育會	仙臺市教育會
7	我が仙臺	仙臺市教育會	仙臺市教育會
10	七郷郷土讀本卷1	宮城県荒浜 尋常小學校	荒浜尋常小學校
11	郷土讀本	桃生郡前谷地 尋常高等小學校	前谷地尋常 高等小學校
11	「伸展」郷土号	大河原尋常 高等小學校	大河原尋常 高等小學校
9. 2	川崎村郷土史	柴田郡川崎村 川崎尋常 高等小學校	川崎尋常 高等小學校
2	多賀城村 郷土の傳説と史話	三塚 栗川	山王尋常 高等小學校
3	石巻郷土讀本 (上学年)	石巻市住吉 尋常小學校	住吉尋常 小學校後援會
7	七郷郷土讀本卷2	宮城県荒浜 尋常小學校	荒浜尋常小學校
10	石巻郷土讀本 (中学年)	石巻市住吉 尋常小學校	住吉尋常 小學校後援會
10. 2	仙臺市民讀本	仙臺市教育會	仙臺市教育會
8	郷土讀本	鹽釜町教育會	鹽釜町教育會
9	鳴瀬郷土讀本	早坂亀太郎	鳴瀬村教育會
11. 1	増田町誌	増田小學校 郷土研究部	増田小學校
12. 11	宮城県郷土讀本 月之巻	宮城県教育會	宮城県教育會
12	宮城県郷土讀本 日之巻	宮城県教育會	宮城県教育會

宮城県図書館、仙台市民図書館、宮城教育大学付属図書館所蔵文献等を基に、筆者作成

《表2》中田小校内研究誌〔体験〕発行状況

年号	特集号等名称	郷土教育に関する主な内容
大.11	1 創刊号(地理号)	中田小地理研究部が中心となり発行。主な郷土資料の他、「私の郷土観」のテーマで同校訓導が郷土概念、取扱について記述。
昭.2	8 学級経営論号	郷土教育の指導方針に基づき、各教科での郷土教育内容を掲載。
昭.3	11 郷土教育号	郷土教育の目的を郷土理解、郷土偉人を題材とした徳育とし、その方法として一、郷土偉人説話、二、郷土地理、三、郷土偉人肖像除幕式や記念学芸会、四、郷土展覧会等を挙げた。
	12 学級経営号	郷土教育の教授方針に基づき、農産物生産状況の資料に基づく算術科での郷土教育実践、綴り方教育と郷土教育との関連等を掲載。
	13 御大典記念号	「郷土の偉人」として、中田村産業開拓者である仙台甘藷栽培の元祖川村幸八について、当時の校長石川謙吾が記述。
昭.4	14 郷土教育論集	郷土論や郷土教育論、方法論等、中田小訓導の「郷土教育に関する私見」を多く掲載。
昭.5	15 郷土教育研究号	校長石川謙吾の「郷土教育論」や、第一回郷土教育研究会〔宮城県教育会後援昭和5年2月〕の開催内容の詳細。
昭.6	17 郷土学習号	郷土資料を数量化し用いた郷土算術や郷土地理等の教科指導の実践、郷土室での郷土資料整備とその活用、郷土調査研究等を掲載。
昭.7	18 低学年郷土教育号	低学年郷土教育の方策を遊戯中心とし郷土算術等、各教科での郷土教育の実践を掲載。
昭.8	19 郷土修身研究号	児童の道徳性調査結果や各学年での修身カリキュラムを掲載。
昭.9	20 国史説方号	国史指導と郷土題材との関連一覧。

〔体験〕は、大正11年度、植田淳之助校長時代に中田小校内研究誌として創刊され、昭和9年度の第20号まで発刊された。当時の同校訓導の課題意識や校内研究の取組状況を知ることができる。
名取郡中田尋常高等小学校関係資料（マイクロフィルム巻一）〔仙台市博物館資料編纂室〕を基に、筆者作成。

II. 斎藤富の郷土教育論

1. 斎藤富の郷土と体験

中田小郷土教育推進の基本理念は、校長斎藤富が、前任校丸森小で構築した、郷土と体験の理念である。

彼の丸森小在職5年間における学校経営方針である《表3》『年次の発展的学校経営の概観』によると、その二、教授観には、大正末以降、児童の発達段階の分析と、それに基づく児童本位の学習方法の確立を実践課題に掲げていたが、昭和2年度、全教科共通の課題として、郷土教育の推進を掲げたことが分かる⁽¹³⁾。その背景には、郷土教育の興隆という当時の初等教育界の動向の他、画一性打破、教育の地方化、実際化を急務とする彼自身の問題意識があった⁽¹⁴⁾。

彼は、児童の直観的な生活環境を学習の基礎とすべきとし、その生活環境を、児童が住む地域的範囲のみを意味するのではなく、そこに存在する

自然や文化を含めた総体であるとした。そしてその生活環境は、発達段階に応じて拡大し、多様化するとした⁽¹⁵⁾。さらに、郷土とは、児童の生活環境における自然や文化〔以下（自然や文化）〕から学習内容を選択し、それに基づきなされる学習プロセスを経ることで、児童の内面に生起する郷土意識とした⁽¹⁶⁾。従って、彼の郷土とは、客観的な地理的概念ではなく、児童の内面に生起する主観的・価値的概念である。

《表3》年次の発展的学校経営の概観

大正十四年度	大正十五年度	昭和二年度	昭和三年度	昭和四年度
一、教育理想観 人生を達観し得るよき日本人の育成	同上	同上	同上	同上
二、教授観 児童の心理観上に立脚して独自学習並に相互学習に依り、而して之れに適切な指導と示唆とにより、価値ある解決をなさせ、以て教科教材の本質に添わんとする。				
①学習態度の練成 1. 自ら進んで習ふ態度 2. 共に進んで聴く態度 3. 能く考へる態度 4. 共に飲んで伸びる態度	①同上態度の致深拡大	①同上態度の個別化、学級化	①同上態度 1. 低学年 遊戯化興味中心の生活学習へ 2. 中学年 自学的学習への直観行動への生活学習 3. 高学年 作業化、学習方法の自己建設、自己学習生活へ 4. 高等科 個性化、職業化、社会的な生活学習へ	①同上態度 血肉化した程度、生活状態化に迄発展せしめる。
②教科研究 自覚態度養成を主眼とした学習指導の研究 1. 説方科 2. 算術科	②教科研究 説方算術両科に於ける指導案の研究	②教科研究 各科主任の活動を主とする郷土研究に入る。学習細目編成に着手する。	②教科研究 学習の生活科、郷土科を主として研究 1 文化研究 2 理科研究 3 技能科研究	②教科研究 全教科深みへの研究 総合的生活科の研究
③教授方法研究 自学訓練教授方法の研究	③教授方法研究 全校あげての同一教科につきての研究	③教授方法研究 個性的、教科の本質に即したる方法の研究	③教授方法研究 未分化学習法の研究、学習法の自己建設	③教授方法研究 練成を主とする。

「教育の永遠性と発展的学校経営」『学校経営』昭和3年3月号 p30～p31 宮城県丸森町小学校長 斎藤富 第一出版協会を基に、筆者作成

彼は、丸森小時代、自然や文化を、科学的、道徳的、宗教的、芸術的、経済的、政治的の6つの形象に分け、それと目的的に、児童の内面に生起する郷土意識との関係を以下のように述べた。児童が、科学的文化財との意義関係により、科学的意義を体験し、道徳的文化財との交渉により、道徳的価値を体験し、宗教的文化財との接触により、宗教的意識を進展させ、芸術的文化財との交渉により、美的意識を進展させ、経済的政治的文化財との交渉により、経済的政治的意識を産出すると⁽¹⁷⁾。

彼が郷土教育の目的としたのは、上述したような郷土意識を、児童の内面に生起させることであった。そしてその目的達成に至る、児童の学習プロセスを体験とした⁽¹⁸⁾。彼が、体験を構成するものとして掲げたのは、以下の3つである。①自然や文化の学習内容、②児童本位の学習方法、③教師による児童の支援⁽¹⁹⁾。体験とは、大正新教育の流れを継承し、児童中心的立場で、自然や文化の学習内容、児童本位の学習方法、教師による支援の3つを有機的に組み合わせ、推進する、児童の主体的な学習プロセスと規定できる。その目的は、低学年から高等科に至る発達段階を踏まえ児童に郷土意識を生起させることであった。それは、村民としての意識や自覚の育成を主とするものであった。背景には、農村生活に価値を見出している児童の育成を重視した、彼の教育観があった。

2. 中田小郷土教育の実践構造

斎藤の前任校丸森小では、昭和2年度、全教科共通の課題として、郷土教育に着手した。そして同3年度、中学年児童対象の特設郷土科カリキュラム『中学年郷土科系統案』を策定した⁽²⁰⁾。さらに低学年、高学年、高等科の各段階での策定を進め、翌年、全児童を対象とする特設郷土科カリキュラムが完成した。しかし、学習内容や実施方法は各学年の独自性にまかされ、その基準や系統性の点で、共通理解が図られていたとは言えなかった。しかし丸森小時代に推進した、体験を理念とする郷土教育は、彼の次の赴任校、中田小で拡充され、実践されることとなる。その基軸は、体験を構成する、自然や文化の学習内容と児童本位の学習方法の拡充と実践であった。

中田小では、昭和6年度、郷土教育に本格的に着手し、特設郷土科カリキュラム『中田郷土科教材配当表』を完成させた。それは、自然や文化の学習内容の選択とその教材化として進められた。そして、児童本位の学習方法である直観的な学習方法の実践との2つを基軸とし、郷土教育を推進した。以下に、それぞれについて検討したい。

1) 学習内容の選択とその教材化

学習内容の選択では、自然や文化の形象に「総合的生活」と「体育的生活」の2つを加え、丸森小時代の6形象から8形象に増やした⁽²¹⁾。そし

て各形象での郷土教育の目的〔目指す具体的な郷土意識〕の明確化と、その目的に合致した、自然や文化の学習内容選択という、各形象の学習内容選択のあり方が明確となった。そのことにより、これまで曖昧であった各形象の学習内容選択の根拠が、その目的との関係から明確となった。各形象の目的と学習内容との関係を表で示したものが《表4》『各形象の目的と学習内容』である。

次に児童の発達段階に応じた教材化の指針を、以下のように設定した。〈低学年〉「家庭を中心とする自然及び社会的な生活」、〈中学年〉「村落を中心とする自然及び社会的な生活」、〈高学年〉「郷土意識の覚醒と政治、経済、社会生活のしくみ」、〈高等科〉「政治、経済、社会生活の概念と農村振興の鍵の示唆」⁽²²⁾。そして、この教材化の指針に基づき、《表4》から、各学年毎に学習内容を選択し、教材化した。各学年での教材の内容をまとめたものが、《表5》『児童の発達段階と教材』である。ここに、各形象の学習内容選択と発達段階に応じた教材化の指針設定と具体的教材化という、カリキュラム編成における教材化のプロセスが、一貫性のあるものとして確立した。

《表4》各形象の目的と学習内容

総合的生活	目的 郷土のあるべき姿と振興への意識の深化	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」
宗教的生活	目的 郷土人としての情操陶冶	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」
道徳的生活	目的 郷土環境に即した道徳、風俗習慣の醸成	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」
芸術的生活	目的 郷土の生活環境を反映した芸術の実践	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」
科学的生活	目的 郷土社会の有機的行程に関する研究と理解	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」
経済的生活	目的 地理的諸条件、世界や国家との関連性を踏まえた郷土経済展開の理解	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」
政治的生活	目的 地方自治発展の理解と実践への意識化	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」
体育的生活	目的 郷土の生活に即した身体育成	
	具体的「内容項目」	教育実践の「機会」

『国民教育の新機構』p93～p98 宮城県中田尋常高等小学校校長 斎藤富昭和7年7月 仙台謄写印刷研究所を基に、筆者作成

《表5》児童の発達段階と教材

郷土教育「教材化」の指針と内容			
《教材化の指針》 家庭を中心とする自然及び社会的な生活			
尋常一	自然観察 神話(家庭祭礼) 言語、風俗習慣	尋常二	自然観察 寺院(奈良平安時代)、西洋神話 言語、風俗習慣
《教材化の指針》 村落を中心とする自然及び社会的な生活			
尋常三	理科的自然観察 寺院や史跡(鎌倉時代前後) 気候観察	尋常四	郷土的地理直観 郷土の偉人や史跡(徳川時代) 気候観察
《教材化の指針》 郷土感の覚醒と政治、経済、社会生活のしくみ			
尋常五	商店、工場等施設・設備見学、 市内・隣村見学史跡見学、 天文観察	尋常六	役場、消防等公共施設、村会、 青年団、在郷軍人会、産業組合等組織・団体、産業、生活と郷土の地理的条件、生活と国、世界の関係
《教材化の指針》 政治、経済、社会生活の概念と農村振興の鍵の示唆			
高等科一	《社会的生活》社会の意義、家の意義と家族、地方団体、《経済的生活》経済の意義、労働と資本、消費、《政治的生活》国体について、憲法、議会、司法行政、財政、国防、国交	高等科二	《社会的生活》村政、同教育、同警察、土労調査、学校衛生、風紀に関するもの、《経済的生活》村の経済、交通、運輸、金融、産業、商工業、農業、《政治的生活》村の将来

『国民教育の新機軸』p106～p108 宮城県中田尋常高等小学校長 斎藤富 昭和7年7月 仙台謄写印刷研究所を基に、筆者作成

2) 直観的な学習方法の実践

次に学習方法を見ると、丸森小では、大正末以降、児童本位の学習方法の確立を目指した。それは、独自学習や相互学習等の学習態度の育成を目指したものであった⁽²³⁾。そして、昭和2年度、郷土教育推進を掲げ、学習内容の郷土への着目とともに、直観的な学習方法が一層重視されることとなった。この年、丸森小では実際の知識の直接的体得を目指し、全校的取組として、児童の生活環境における自然観察、歴史的観察、工場見学、店舗見学等の実地見学を行った⁽²⁴⁾。

斎藤の次の赴任校中田小では、丸森小での実践を踏まえ、観察や調査等の直観的な学習方法の工夫の検討を重ねた。《表6》は、昭和6年同校職員会議で議題として検討された、直観的な学習方法に関する内容をまとめたものである。

《表6》から、昭和6年7月10日、夏休み中の学習課題である、郷土学習帳作成の検討がなされたことが分かる。それは、児童の自主的な観察や調査により、郷土学習に取り組ませることを目的とした⁽²⁵⁾。その内容を見ると、計31テーマが設定され、それに沿って、学年毎に課題が具体的に設定された。例えば「水産業」のテーマでは、尋常1「カワ」、尋常3「用水池」、尋常6「水産業」、高等科2「経済機関」と設定され、また、「農業」のテーマでは、尋常1「アメフリ」、尋常2「雨」、尋常4「食物」、尋常5「農学」、尋常6「国運発展」、高等科2「凶作防備」と設定された⁽²⁶⁾。

これを見ると、発達段階に応じ、各学年の課題

を系統的・発展的に設定するのに即応し、児童による観察や調査の視点も拡充されていることが分かる。つまり、低学年では、漠然とした郷土の知識習得と郷土に対する注意や興味の喚起、中学年では、郷土の正確な知識習得と郷土に対する価値意識の育成、高学年では、流通や産業構造等からの郷土の理解、そして高等科では、郷土の現状認識とその振興である。

《表6》昭和6年中田小職員会議録に見る直観的な学習方法の検討

期 日	《議題題目》及び検討内容
昭和6年	
1月6日	《児童の郷土研究》 郷土読本編纂、郷土室経営とともに郷土的方法として、児童自身による郷土研究の方法の検討
2月10日	《春休み中の児童の調査物の提出》 春休み中の課題とする児童の郷土調査の内容及び方法の検討
4月7日	《郷土科学習指導案の形式》 各教科指導において、学習過程の中に、児童による直観的な学習方法を意図的に盛り込む指導案の形式の検討
5月18日	《校長指示注意事項》 斎藤富校長が、各教科指導と見学、観察に有効な郷土の遺物等の郷土室展示を工夫するよう指示 《郷土室経営の検討》 児童の見学や観察に有効な郷土の遺物や児童の郷土作品の展示について検討
7月10日	《校長指示注意事項》 斎藤富校長が、夏休み中の郷土学習の巡回指導を徹底するよう指示 《郷土学習帳作成》 夏休み中の郷土学習に有効な郷土学習帳の学習内容と方法の検討
9月15日	《郷土学習作品展覧会の開催》 夏休み中に児童が製作した郷土作品の展覧会開催の検討
11月16日	《校長指示注意事項》 斎藤富校長が、これまで児童が製作した郷土作品、郷土に関する図書、統計、成績品等の各教室後方への陳列や郷土室での積極的な展示を指示

『名取郡中田尋常高等小学校職員会議録』名取郡中田尋常高等小学校関係資料(マイクロフィルム巻三)(仙台市博物館資料編纂室)を基に、筆者作成

教科指導においても、昭和6年4月7日、児童の直観的な学習方法を盛り込む指導案の形式が検討され⁽²⁷⁾、以降、各教科の指導で、直観的な学習方法導入の工夫が積極的になされた。同年11月23日同校開催の郷土教育研究会における研究授業指導案を見ると、各教科領域を問わず、様々な工夫が試みられている。例えば、尋常3修身「川村幸八翁」では、江戸時代、甘藷栽培導入により、郷土の産業振興に貢献した翁の業績賛美のため、事前課題として、各家庭での甘藷栽培状況を調査させた。また、高等科2地理「産業上より見た我中田村」では、村の農産物生産と農村振興の学習の事前課題として、主要生産物の移出、市場販売状況、村での惣菜栽培発達の理由を調査させている⁽²⁸⁾。ここでの調査を見ると、その視点は、先の郷土学習帳での発達段階に応じた観察や調査の

視点に概ね一致していることが分かる。

中田小では、児童の発達段階に応じ、自然や文化の学習内容の選択とその教材化、直観的な学習方法の実践、この2つをうまく組み合わせ、郷土教育を実践した。

Ⅲ. 中田小特設郷土科の展開と独自性

1. 教材の系統化の実際

中田小では、昭和6年度、特設郷土科カリキュラムとして、《表7》『中田郷土科教材配当表』を策定した。それは、これまで検討してきた、中田小郷土教育の実践構造を、カリキュラムに具現化したものである。以降、同小特設郷土科は、これに基づき、毎週1時間程度実践されることとなった⁽²⁹⁾。

これを見ると、学習の系統性を重視し、幾つかの教材では、発達段階に応じ、そのねらいや学習内容、学習方法を拡充させながら、重複して扱っていることが分かる。例えば「七夕祭」の教材で

は、〈尋常1〉では、七夕祭の催しとその背景や竹を用いた飾りの製作を内容とし、〈尋常2〉では、恒星の動きや天体の距離を基にした天の川の説話を内容とした。そして、〈尋常3〉では、五節句の1つとしての理解をねらいとし、祭りの期限や伝説、歴史的経緯等を内容とした⁽³⁰⁾。

全体的な教材の配列を見ると、低学年と中学年では、地理、歴史、自然的な教材が多く見られるのに対し、高学年と高等科では、学年が進むに従い、政治、経済、社会的教材が増えてくる。そして、高等科2年では、そのほとんどが政治、経済社会的教材で占められている。このことは、低学年や中学年で学習が、高学年や高等科での学習に、必ずしも発展的に継承されているとは言えないことを示している。中田小特設郷土科カリキュラムのこのような二重構造的特質は、それへの公民的教育⁽³¹⁾の導入のあり方と大きく関わっている。

《表7》中田郷土科教材配当表

学年	低 学 年		中 学 年		高 学 年		高 等 科	
	尋 一	尋 二	尋 三	尋 四	尋 五	尋 六	高 一	高 二
姿 態	未分化の生活 (遊戯的方法)		外向的分化的体験生活 (遊戯的作業的方法)		内向的分化的体験生活 (作業的方法)		分化発展の統一生活 (個性的方法)	
四月	観桜会 中田神社 春の野 学校	桜の花 春野 野辺の花	招魂祭 桜花 さつま苗 種子の萌芽	館清水 やぶ 館屋敷 名取川	僕等の学校 村社について	中田村役場	家(その一, その二) 社会	中田村長 警察事務
五月	家畜遊び 端午会 役場 藩祖公	大善院 端午の節句	端午の節句 すずめ 蚕 宝泉寺	国道 前田荘 沼地看板 斎藤安右門	端午会 衛生について	中田消防組	地方団体・村 地方自然観察	通信事務 教育
六月	河原遊び 果物	宝泉寺 名取川	宝林寺 梅雨	梅雨 広告 中田郵便局	松島塩釜遠足 入梅	中田村会	地方自治団体 県	宗教
七月	開校記念日 水泳 七夕祭	七夕祭 御堂院 御盆	七夕 開校記念日 蟬	土用夏至 野菜と産地	七夕 高館山	中田村会	宮城県自然 地理	芸術 土労
九月	名取川 花集め 彼岸	光西寺 ばった こぼろぎ	二百十日 こぼろぎ 彼岸 名月	林子平 彼岸 中田村の並林 橋	我が家 名取川	中田村青年団	郷土の産業状態 (夏季郷土学習 中心)	交通運輸
十月	野菜 のりもの遊び こぼろぎ いもほり	ねずみ 磁石 屋号並紋所	青葉祭 いなご取り 梅の花	伊達政宗 温度 節句 名月	印刷所 前田の荘を中心に 口碑伝説の取扱	在郷軍人部会	郷土史跡見学 秋の産業 村廻り	金融
十一月	健康週間 木葉 菊の花 稲上げ	郷土地図の見方 木の葉 商店	体育デー お刈り上げ えびす講	白菜 初霜 支倉六右工門 初雪	寺について 郵便局について	中田村産業組合	中田村の店舗及び 商工会の活動状況	産業状態 中田村の商業
十二月	オクワシ 霜 初雪 仲店遊び	くも クリスマス	油 かはよけの朔日 冬至	田と畑 冬至	交通 警察 駐在所	中田村文化構造 姿と郷土 地理行程	郷土の歴史的人物 宗教	中田村の工業 中田村の農業
一月	すすはき 雪だるま 餅つき	雪の世界 新年	めむかひ 雪 正月 菅井梅関	川村幸八 雨量 大寒 中田村の人口	元朝参り 兵役	村の補修学校 戸主会	経済的生活 村の財政	家庭生活の改善
二月	書き初め 菅井梅関 川村幸八	武田工場 老女神社	川村幸八 名取老女 名取の里	菅井梅関 夜番 節分 陸前中田駅	採礫会社 産業組合	婦人会 壮年会	労働と資本 分業と協同	中田村文化の将来 仙台市内見学
三月	雛祭 停車場 春季皇霊祭	ひな祭 春の彼岸	節分 ひな祭 名取四郎	柳生紙 星座 土地	雛祭 郷土賢人祭	中田村文化構造 姿と世界 地理行程	中田村の郵便局及 び銀行 保険	よき村人とよき日 本人

『国民教育の新機構』 p108～p110 宮城県中田尋常高等小学校長 斎藤富 昭和7年7月 仙台謄写印刷研究所を基に、筆者作成

2. 公民的教育の導入

1) 公民的教育導入の背景

日本における公民教育は、実業補習学校で先駆けて実践された。大正9年12月、実業補習学校公民科設置の法的根拠が明示され、大正13年7月、第一回公民教育講習会で、文部省書記官兼参事官木村正義は、公民教育の必要性を力説した。そして同年10月9日、実業補習学校での公民教育の内容が確定した。さらに昭和6年1月、師範学校規定中改正により師範学校公民科が設置された⁽³²⁾。初等教育段階での公民的教育導入への関心も高まり、同年5月、第十一回全国小学校女教員大会で、第二号議案として、「小学校公民教育上特に留意すべき点」が審議された⁽³³⁾。

このような中で、宮城県初等教育界でも公民的教育への関心が高まった。県教育会発刊誌宮城教育を見ると、昭和3年5月開催の東北六県北海道教育大会における文部大臣諮問「公民教育実践方案審議」〔同年6月号⁽³⁴⁾〕、県教育会主催懸賞論文「公民的態度育成の方策としての郷土教育」〔昭和5年5月号⁽³⁵⁾〕、第二回郷土教育研究会〔桃生郡北村小、同年7月〕での公民教育と郷土教育の関係についての討議〔同年9月号⁽³⁶⁾〕、中田小訓導星野達郎の論文「郷土教育、勤労教育、公民教育」〔昭和6年6月号⁽³⁷⁾〕、昭和6年度教育学夏季講習会での講話内容紹介「勤労教育、公民教育、郷土教育」〔同年7月号⁽³⁸⁾〕等の記事が見られる。郷土教育との関連の視点から、公民的教育実践のあり方が論じられた。それは、斎藤自身の関心の所在でもあった。

2) 公民的教育の展開

斎藤は、昭和6年1月の師範学校規定中改正での師範学校公民科設置が、初等教育への公民的教育導入の契機となったとした⁽³⁹⁾。中田小でも師範学校公民科の内容を基に、発達段階に応じ内容編成し、公民的教育を導入したことが分かる。例えば師範学校本科一部（第四学年）公民科計15単元中、以下の4つは単元名が同じである。「我家」、「交通」（以上尋常5）、「教育」（高等科2）、「宗教」（高等科1、2）。また、以下は内容上の関連が大なるものである。『公安』と「警察、駐在所」（尋常5）、「警察事務」（高等科2）、『市町村』と

「中田村役場」（尋常6）、『地方自治』と「地方自治団体」（高等科1）、『産業』と「中田村の工業」、「中田村の商業」「中田村の農業」（以上高等科2）、『農村と都市』と「中田村文化の将来」、「仙台市内見学」（以上高等科2）等〔『』は師範学校公民科、「」は中田郷土科教材配当表の単元名⁽⁴⁰⁾〕。

中田小では、公民的教育を、高学年以降の郷土教育に導入した。そのことが、低学年から中学年までの学習が、高学年以降の学習に十分継承されない、同小特設郷土科カリキュラムの二重構造的性質の原因となった。そして、公民的教育の目的を、郷土社会としての農村の全体的認識と、その改善への意識の高揚とした。それは、児童が生活する農村の現状を、政治機構、経済組織、社会状況等の視点から、全体的構造的に把握すること、さらに、そこから、農村生活改善への意識を高めることであった⁽⁴¹⁾。

ここで注目したいのは、中田小では、農村の全体的構造的性質は、地理的条件とそこでの農業生産に依るとしたことである⁽⁴²⁾。例えば、尋常6「中田文化構造姿態と郷土地理行程」〔《表7》以下略〕、高等科1「経済の意義」では、仙台市近郊という地理的条件が、近郊農業として野菜生産を盛んにし、村の生活を支えている現状を理解させる内容となっている⁽⁴³⁾。

そして、農業生産を基に農村の現状を構造的に理解させる指導は、当時の農村経済の状況下で、経済的視点からの農村生活改善へと、児童の関心を高めることにつながった。例えば高等科2「中田村の農業」では、村の農業生産の現状を理解させた後、生活改善に向けて、中田村の農業の今後のあるべき姿を考察させた⁽⁴⁴⁾。

直観的な学習方法の実践を見ると、中田小では農村生活改善を、郷土教育の目的として掲げたため、児童の調査は、郷土課題の意識化やその解決策を導く事実認識という性格を持っていた。それは、低学年や中学年での観察や調査とは異質な、現実的な、切実感のあるものである。例えば、高等科2「中田村文化の将来」では、村の人口動態の統計的調査を行わせ、それに基づき、人口増加の理由や、村人としての望ましい生き方について

考察させた。さらに、高等科2「よき村人とよき日本人」では、郷土の公共物調査を行わせ、それに基づき、生活の心得の修得、理想的村人像、さらには、理想的日本人像の追求へと学習を発展させた⁽⁴⁵⁾。

3. 中田小郷土教育の独自性

中田小では、公民的教育を、高学年以降の郷土教育に導入した。それは、農村の全体的認識と、それに基づく農村改善への意識の高揚を目指したものであった。そして認識対象である農村の現実には、その地理的条件と農業生産に規定されるとした。つまり農業を主産業とする農村の現実認識とその改善という、昭和初期の多くの農村が直面した課題が、農村小学校での郷土教育実践に反映された⁽⁴⁶⁾ のと同じく、中田村の課題として、その公民的教育に反映されていた。

それは、同じく、郷土に着目した学習内容の構築と大正末以降の児童本位の学習方法の継承と、その実践を特色付けられた、川崎市田島小〔山崎博校長〕の郷土教育⁽⁴⁷⁾ とは大きく異なる。それは、農村と都市という、児童の生活環境の違いによる。田島小でも初等教育段階での公民的教育に着目し、高学年以降の郷土教育に導入した。しかし、その目的は、都市機能の視点からの都市の全体的認識と、その生活を維持する価値観への児童の同化であった。そこには、解決すべき経済的課題はなく、従って、都市生活の改善という意識が生じることがなかった⁽⁴⁸⁾。

低学年から高等科に至る特設郷土科カリキュラムの全体像を見ると、公民的教育の導入が、中田小郷土教育の独自性を生んだ。郷土に着目した学習内容の選択とその教材化と、直観的な学習方法の実践を組み合わせ、体験理念の具現化を、低学年から高等科に至る実践の一貫性として掲げ、郷土教育を推進した。それは、大正新教育の流れを継承し、斎藤富の前任校丸森小での実践を基にしたものであった。その目的は、児童の郷土意識の生起であり、村に生きる村民としての自覚や意識の育成を重視した、農村小学校の指導者である斎藤富の教育観に基づくものであった。

しかし、高学年以降は、公民的教育の導入により、その目的が児童の郷土意識の生起から、中田

村の現実の直視と課題解決への意識の高揚という切実性のあるものに変容した。そして、それは、農業生産の実態とその課題を重視した学習内容の構築、それと密接な児童の観察や調査等の直観的な学習方法の導入を促した。児童の生活環境とそこでの生活体験を重視する実践は、先行研究では当時の農村小学校には数少ない実践と指摘されたが、高学年以降のこのような実践の特質は、経済的課題を抱えていた、当時の多くの農村小学校の実践に共通するものであった。変容の背景には、昭和初期の農村経済の被弊という、中田小の地域性に起因する現実的課題があった。そのことが、中田小郷土教育の独自性をもたらしたととらえることができる。

結 語

先行研究ではこれまで、中田小郷土教育を、その学習方法に着目し、あるいは、その学習内容に着目し、論じてきた。しかし、昭和初期、郷土教育の全国的興隆において、中田小では、郷土に着目した学習内容の選択と教材化、直観的な学習方法の実践、この2つを組み合わせ、郷土教育を推進した。しかし、その実践は、農村としての中田の地域性を反映していた。本論の課題は、その推進の全体像を明らかにすることであった。

具体的なカリキュラム構成の内容を見ると、高学年以降、公民的教育を導入し、郷土の全体的構造的な把握を目指した。その考え方は、郷土を把握する新視点として、当時の郷土教育における新しい実践として評価されている⁽⁴⁹⁾。

注

1. 『昭和初期社会認識教育の史的展開』 p30 谷口和也 平成10年 風間書房
2. 「昭和戦前期農村小学校における郷土教育実践の変容」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』 p212 板橋孝幸 平成17年3月
3. 『我国に於ける直観教授・郷土教育及合科教授』 p129 伏見猛彌 昭和10年 日獨書院
4. 『日本新教育百年史』第三巻 p245
5. 「大正・昭和戦前期宮城県中田小学校における郷土教育の展開－村内教育体制とカリキュラム改造構想

- に着目してー」『東北教育学会研究紀要』第10号 p 9～p 11 佐藤高樹 平成19年2月
- また、中田小郷土教育の実態に関する資料的論及として『前掲書』(注3) p 173～p 182 伏見猛彌、「生活教育の歴史と現状とに對する批判」『教育』第五卷 第6號 p 18～p 22 山下徳治 昭和12年 岩波書店がある。
6. 『宮城県教育百年史』第二卷 p 184 昭和52年 宮城県教育委員会
 7. 桃生郡北村小の郷土教育実践については、拙稿「昭和初期農村小学校における郷土開発的郷土教育の展開ー宮城県北村尋常高等小学校における実践を事例としてー」『社会系教科教育学研究』第19号 p 41～p 49 平成19年 社会系教科教育学会に詳しい。
 8. 『前掲書』(注6) p 185
 9. 『同上書』 p 386
 10. 『児童の郷土誌』 p 13 中田尋常高等小学校訓導 星野達郎 大正13年
 11. 石川謙吾は、大正14年度以降5年間、中田小校長として、郷土教育を推進した。その実践は『我国に於ける郷土教育と其施設』p 112～p 113 伏見猛彌他 昭和7年 目黒書店に詳しい。
 12. 斎藤富は、明治23年11月生まれ。宮城県角田中学校から同44年3月、宮城県師範学校本科第二部卒業。大正14年度から昭和4年度まで丸森小校長、同5年度から同10年度まで中田小校長、同11年度から同13年度まで宮城県女子師範訓導等を歴任。自伝の『私のライフ・サイクルの業績』では、中田小での教育実践を、郊村型郷土教育の機構とし、郷土教育に本格的に取り組んだとしている。『私のライフサイクルの業績』斎藤富 昭和51年 東北教育図書
 13. 丸森小では、昭和2年度、教科主任を中心に全教科で郷土教育に取り組むこととなった。「教育の永遠性と発展的学校経営」『学校経営』昭和3年3月号 p 30～p 31 宮城県丸森小学校校長 斎藤富 第一出版協会
 14. 研究「教育の地方化と其の徹底方案」『宮城教育』昭和3年1月号 p 13～p 18 宮城県教育会
 15. 『郷土生活中心 私の作業学校』p 57 斎藤富 昭和6年 郁文書院
 16. 『国民教育の新機構』p 65 斎藤富 昭和7年 仙台謄写印刷研究所
 17. 『前掲書』(注15) p 59
 18. 『同上書』 p 58～p 60
 19. 『同上書』 p 38～p 39
 20. 『同上書』 p 237～p 239
 21. 自然や文化の形象を、丸森小では、科学的、道德的、宗教的、芸術的、経済的、政治的の6形象としていたが、中田小では、総合的、体育的の2つを加え、計8形象とした。
 22. 『前掲書』(注16) p 93～p 98
 23. 『前掲書』(注15) p 78～p 80
 24. 『同上書』 p 237～p 238
 25. 『昭和6年7月職員会議議事録』名取郡中田尋常高等小学校関係資料〈マイクロフィルム巻三〉〔仙台市博物館資料編纂室〕
 26. 『同上』
 27. 『昭和6年4月職員会議議事録』名取郡中田尋常高等小学校関係資料〈マイクロフィルム巻三〉〔仙台市博物館資料編纂室〕
 28. 『郷土教育研究会記録』名取郡中田尋常高等小学校関係資料〈マイクロフィルム巻三〉〔仙台市博物館資料編纂室〕
 29. 『前掲書』(注3) p 176
 30. 「七夕祭」『昭和六年度郷土科指導案』名取郡中田尋常高等小学校関係資料〈マイクロフィルム巻三〉〔仙台市博物館資料編纂室〕。「七夕祭」以外にも、「雛祭」、「彼岸」等では、発達段階に応じ、そのねらいや内容を拡充し、重複して扱っている。
 31. 初等教育段階では、公民科が設置されなかったことから、「公民的教育」とした。しかし、関係資料や文献等で使用された「公民教育」の語句は、そのまま掲載、活用した。
 32. 公民教育導入の経緯の詳細については、『近代日本カリキュラム政策史研究』p 611～p 618 水原克敏 平成9年 風間書房に詳しい。
 33. 『前掲書』(注16) p 22
 34. 『宮城教育』昭和3年6月号 p 24～p 30 宮城県教育会
 35. 『宮城教育』昭和5年5月号 p 1
 36. 『宮城教育』昭和5年9月号 p 54
 37. 『宮城教育』昭和6年6月号 p 1～p 5
 38. 『宮城教育』昭和6年7月号 p 1 教育学夏季講習会は、昭和6年8月21日から5日間にわたり、宮城

県大河原尋常高等小学校を会場に開催された。内容
と講師は、以下の通りであった。勤労教育 東京女
高師教授 北原種一，公民教育 東北帝大教授 廣
濱嘉雄，郷土教育 宮城県角田高女校長 菊地勝之
助

39. 『前掲書』(注16) p13

40. 師範学校公民科設置の目的、内容、指導上の配慮
事項等については、『明治以降教育制度発達史』第七
巻 p678～p680 文部省内教育史編纂会 昭和14年3
月 教育資料調査会に詳しい。

41. 『前掲書』(注15) p12～p19

42. 「農村教育の方向—農作教育への道—」『宮城教育』
昭和5年5月号 p12～p15

43. 尋常6 「中田文化構造姿態と郷土地理行程」『昭和
六年度郷土科指導案』名取郡中田尋常高等小学校関
係資料〈マイクロフィルム巻三〉〔仙台市博物館資
料編纂室〕では、村の主要産業として惣菜生産を取
り上げ、その種類と販売経路を学習させている。ま
た同じく高等科1 「経済の意義」では、中田村の自
然と経済の關係に着目させ、肥沃な地質に恵まれ、
仙台市に近いという地理的条件が、野菜供給地とし
ての村の経済を成立させていることを学習させた。

44. 高等科2 「中田村の農業」『昭和六年度郷土科指導
案』名取郡中田尋常高等小学校関係資料〈マイクロ
フィルム巻三〉〔仙台市博物館資料編纂室〕では、
その指導過程の八で、中田村の農業と村の将来につ
いて考察させている。

45. 高等科2 「中田村文化の将来」, 「よき村人とよき
日本人」は、ともに『昭和六年度郷土科指導案』名
取郡中田尋常高等小学校関係資料〈マイクロフィル
ム巻三〉〔仙台市博物館資料編纂室〕に収録

46. 昭和初期の多くの農村小学校の郷土教育が、被弊
した農村の立て直しを念頭に、農村現実の理解を目
的としたことが指摘された。『前掲』(注3)

47. 『前掲書』(注3) p179 川崎市田島小は、当時、
中田小とともに、児童の体験世界の発展拡充を目指
す郷土教育実践の代表校とされていた。『同上書』p
173～174

田島小学校の教育に関する最近の研究では、

①その「生活科」カリキュラムの編成過程に着目し、
郷土川崎の文化財からの構造的・関連的教材選択と
配列及びその限界について分析したものと、

田島小学校における体験教育の理論と実践—文化教育
学の移入とその限界—『カリキュラム研究』第13号
p61～P73 金子知恵 2004 日本カリキュラム学会

②職業指導との関連から、田島小学校の体験教育の実
態を分析したものと、 「都市部工業地帯における
新教育実践の展開—田島小学校の体験教育を事例と
して—」『地方教育史研究』第26号 p63～p81 金子知
恵 2005 全国地方教育史学会等がある。

48. 『前掲書』(注1) p133～p134

田島小学校の教育が、「よき川崎市民の育成」とい
う都市生活維持のための価値観への児童の同化を目
指していたことが指摘されている。『前掲書』(注47・
①) p69

49. 『前掲書』(注1) p133